

「神の恵みに生かされて」

マルコによる福音書9章49-50節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は先日来学んで来たマルコ9章の最後のところで、主イエスが「人は皆、火で塩味を付けられる。塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩に味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい。」と塩について語られているところです。

ここで主イエスの言われる塩・塩気とは、何を意味しているのでしょうか。私たち人間が生きて行く上で欠かすことの出来ない塩は、昔から貴重なもので、時代によっては高価なものでもありました。古代ギリシャ・ローマ時代、兵士の給料を塩で支払っていたことがサラリー（給料）の語源となっています。また塩は消毒や食べ物の保存に有効であることから、＜清め＞という役割も持っていました。旧約のレビ記2：13に「穀物の献げものにはすべて塩をかける。あなたの神との契約の塩を献げものから絶やすな。」とあるように、律法では献げものを清めるために塩が使われ、そのため神殿の横には塩の蔵がありました。

そのような背景の中で、主が言われた「自分自身の内に塩を持ちなさい。」は、外側から塩を擦り込むのではなく、内側から自身を清める塩を、自分の中に持つということです。また「塩味を付けられる」という受け身の言葉については、コロサイ4：6に「塩で味付けされた快い言葉で語りなさい。」とあり、この＜快い＞の原文が＜（神の）恵みに於ける＞であることから、塩で味付けされた言葉とは、＜神の恵みに於ける言葉＞であると分かります。神の恵みに於ける言葉については、ヨハネ1：14に「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」とあることから、それは、「父なる神が遣わされた独り子主イエスの十字架の死によって私たちは罪赦され、神の子として新しく生かしていただくこととなった」ということであり、従って「塩味を付けられる」とは、主イエスによって与えられた神の恵みに生き、それを語るということになるのです。

その＜神の恵みの塩＞を自分の内に持つことについては、「火で塩味を付けられる」との主の言葉が心に残ります。しかし＜火＞と聞きますと、私たちは前回の箇所の地獄の火を連想し、その神の裁きの火と神の恵みの塩味を私たちに付ける火という両極端にあるはずのものが、同じ「火」としてあることに納得の行かない思いがします。これは確かに難しい問題ですが、しかし私は次のように理解出来ると思うのです。それはこの正反対のものが結びつく一点があるということです。その一点とは、主イエスの十字架です。私たち人間のすべての罪を背負い、神の裁きの火に焼かれてくださった主イエスの出来事によって、私たちは裁きの火を免れると同時に、神の救いの恵みの塩味を自身の内に付けられたということになるからです。

主によって救われ、神の恵みの塩味を付けていただいた私たちは、もはや自分の働きで人生に味を付ける必要はありません。詩46：11に「力を捨てよ、知れ わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」とあります。自分の力により頼むことをやめ、主なる神こそがあがめられるべき真の神であることを知ることによって、「万軍の主はわたしたちと共にいます。」という信頼に生きることが出来るのです。躓くことも躓かせることもない平和な交わりの中で、共に塩で味付けされた恵みの言葉を語って行く・・・これこそが私たちが熱心に励み、求めて行くべき信仰の道なのです。

(説教要約 羽入田悦子)